

京鹿子

平成二一、二六年、二
通巻一〇八四号、行刊



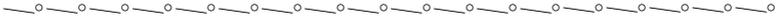
12月号

豊田都峰

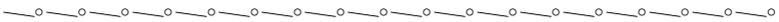
心響集 その十二

噴水や飴ひとつなめつくしけり
噴水や鳥二羽より長居せり
万葉の芽子よりいく世はなと生く
梨成るや連山四方に晴れわたる
神奈備を東に置きて秋雲舞ふ
柳散る石階流れに沈みがち





穂すすきにまつはるは風のみでなく
柿のころ野の石あれば掛けもして
蟪蝼の斜なる構の野面晴れ
かまきりのかくしきれざる三角面
産土の祠を辻に柿たわわ
人称へ恋しく草の絮とばす
里山はそれぞれなりに神無月





— 近 詠 —

晩秋

鈴鹿 仁

晩秋のいろをさがせば水に影
菩提子や人恋ふ風と雲を追ふ
花ひひらぎ門守る形のこぎり歯

— 追懐 — (その四)

百の鳥聖地こ育ち花うつぎ

〔昭和五十六年作〕
〔鞍馬寺吟行〕

門扉閉づ秘仏に逢えず貴船菊

〔昭和五十七年作〕
〔貴船吟行〕



— 近 詠 —

女潮日和

和田 照海

島 人 に 女 潮 日 和 の 藻 刈 舟

記 念 樹 を 終 の 木 と し て 法 師 蟬

敗 戦 を し ら ぬ 位 牌 を 納 め け り

色 柿 に さ そ は れ ご こ ろ 父 祖 の 里

障 子 貼 る 小 さ な 影 は 妣 が 来 て

秀華採集

流燈会果てて独りの灯に戻る

井尻 妙子

多くの人中にいて感じる孤独心厳しいが、「流燈会」を済ませてのあとほど、
わびしいものはない。人間は一人ではあるが、身近な人は大切である。しかし、
去ってゆくのがこの世である。

蝸牛身に余るもの足らぬもの

金子 野生

アコーデオンのら音をはずし秋の蠅

田 渕 昌 子

前句は対象を見つめてのもの。いろいろと分析するのも楽しいもの。後句はい
ないと思っていたのに、突然の出現か。



神麓集

磯菊 藤岡紫水
美しき嘘見えかくれ十三夜
宿りたる月こぼさじと蓮の露
天日の昏きに溺れ曼珠沙華
まどひみしゆゑに打たれし秋の蚊
磯菊や没り日を乗せて退る海

北川孝子
頼りなき身を頼られし秋穂草
草雲雀一村夕陽したたれり
俎に月日のくぼみ大西瓜
聞き役も絆のひとつ白露来る
夏果ての身にくらくらと山河あり

障子明り 松本鷹根
丸窓の障子明りの入江宿
静止影連ね漁港は冬に入る
中腹は安らぎどころ返り花
梯は障子明りの正座なり
御堂影揺れて冬日を彩にする

紅唇 丸井巴水
薄切りのレモンが甘し誕生日
紅茶葉の舞踏の中にある青夜
秋なかば紅唇香るワルツの夜
月光を巻き込む潮路まだ抜けず
チヤペル出て月の野道を一人充つ

松田都青
何処までも転ぶ鉛筆見て暑し
姿なきものは尊し魂送り
近づけば遠くなる人西鶴忌
姫百合を賣る里人は声美人
山上でハンカチ振つてる望遠鏡

彼岸花 塩貝朱千
秋風と来て師の句碑へまつすぐに
透かし見て菩提樹の実を探しぬる
声明や蜂を踏むなと寺の縁
裏窓に蜘蛛を住まはせ門前茶屋
彼岸花活け現し身の手を洗ふ



京鹿子集

豊田都峰選

流燈会果てて独りの灯に戻る

京都 井尻 妙子

水明りして流燈のととのへり

鮭遡る愛の名残のそげし鼻
過去の日へ狂女走れり桐一葉

蝉の森いくつ抜けても多忙なり

農場主は寡黙な酋長サンガラス

暗転の後のひまはり畑かな

星月夜伝へたきこと湧いて出る

蝸牛身に余るもの足らぬもの

青梅 金子 野生

秋日和初リサイタル少女の指

心大客一人出て一人入る

餅つきや臼杵作る大企画

水のごと過ぎゆく僧やいよ暑し

秋の雲スケツチブツクに青の空

後戻りしさう晩夏の観覧車

新涼や暮れゆく空に雲の筋

アコーデオンのら音をはづし秋の蠅

高槻 田淵 昌子

鯛雲うす水色の空泳ぐ

朝顔やなまけし右脳のねぢを巻く

秋の暮日本の友よ目を閉ちて

オハイオ 水谷 直子

アリソナ 伊吹 之博

鬼瓦の力み返つて晚夏光

札幌 野村 鞆枝

ほそめてもなほ波眩し晚夏光

卸し金の裏まつ平ら秋大根
送り火は百円ライター尽きるまで
いい街に物語あり秋の雲

風のまま寄せては返す芒原

脳細胞ひとつづつ消えいなびかり

マラソンの駆け抜く木影晚夏光

モネの絵に魅せられてゐる秋扇

妻も又また起きてくる熱帯夜

酒田 藤波 松山

ほぐれなき心の闇や天の川

谷を出て月の大河となる魚港

虫すだき我一人有る湯舟かな

天領の金山に生れ蟬骸

高野 春子

墓参り白き卒塔婆友の墓

花野静める活断層の白き線

茶道の会もてなす煎茶秋七草

渋川 東 秋茄子

雨あがり紅鮮明に水引草

秋蝶の葉末に忽と吹かれゐる

布川 孝子

虫の音の騒がしましてペンを止め

考へる蠅螂自動ドアの開け閉め

花茗荷酒肴の膳に香り立ち

さいたま 神田惣介

孫去りて妻と二人の冷奴

赤信号向かひの人も汗を拭く

豪雨来て墓参諦め去る京都

献杯すボルドーワインや盆迎へ

松戸 岡山 敦子

お下げの児未だ懐かし大文字

糸のころ草ギヤマンガラスに野風呼ぶ

死に蟬と戯れる猫裏小道

花からすうり一步ごとに闇濃くす

青すすき線路の消える先は母

千葉 伊藤 希眸

帰郷かな大口で喰ふずんだ餅

夏満月熱気を冷ます川の音

これ以上風鈴鳴れば仲違ひ

災ひの雷光四方の天走る

習志野 上野 紫泉

台風予報影絵のやうに夫動き

直江 裕子

そら然うよまだ恋だつてする晚夏

休刊の新聞ひと日秋麗

嫌ひ好き優しい距離にふうせんかづら

秋扇隣り合せるもらひ風

花鳥瓜短き命星になる

青山の朽ちし柱に蟬の声

船橋 元橋 孝之

残し去る素足の跡を砂浜に

羽団扇に太刀と杖もつ天狗殿

心垢捨て温顔を得し大瓢

一瞬を線の長さに流れ星

過去形で書かれし手紙遠花火

回遊の鮪の目玉涼新た

苦瓜の疣の数ほど喰ふ小言

新涼やただ黙々と墨を磨る

いつの間に庭番となる紅芙蓉

病癒え夏襟きりり師の板書

嫁ぎたる娘手伝ふ魂迎

花茗荷やぐらの奥に千の魂

海の碧消えてひぐらし鳴きをはる

改装のすすまぬ母屋秋の雨

浅草の老舗七色唐辛子

鍋焦がす臭ひの吾が家秋暑し

眠る前祈る言葉や秋の雨

盆踊り腰掛けしまま手振かな

鉢手入家の中迄蚊に憑かれ

日盛りやお手軽料理の豆腐買ふ

赤色燈残しパトカー夏の闇

ビル焼ける高層砂漠ゆらぎ立つ

午後二時の銀座歩行者天国コテンかき氷

さるすべり江州日野は母の郷

海底に目あり耳あり敗戦日

乾坤一擲炎帝の野に出陣す

余白なら金魚のやうに生きたしと

雨あとの空の秘色や長崎忌

一生の一処ひとへに紅はちす

存問のいろ深めをり秋あかね

秋蟬の絶えて山河の残りけり

秋立つ日訃報哀しく遠き宙

庭一面秋海棠に友想ふ

凌霄花ホツホツ燃えて垣の外

夜想曲眠りいざなふ秋の虫

ほぞ固めひとり赴任冷奴

朝の陽を孕み朝顔揃ひ咲き

今日限り今日へ乾杯生ビール

涼新たすこし涼しさ早や過ぎて

大袈裟に落ちて青柿黙に入る

青ふくべ入りきれない秘話ばかり

逝きし人顔・顔・顔や蓮葉波

終戦忌ルーツをたどる切通し

高島正比古

中島悠美子

中西 明子

中村 三郎

神田美千留

児玉 有希

野中 圭子

岸上 道也

東京 丹羽 武正

金子 正道